

# レイチェル・カーソンと自然保護運動

美しきものは消え、帰ることなし——W・H・ハドソン  
『われらをめぐる海』

上岡克己

## 1. 自然観の変遷

カーソンがアメリカの環境保護運動に与えた影響についてはしばしば論じられている。例えばフィリップ・シャベコフは『環境主義』の中で、「『沈黙の春』は世界中の人々の生き方を変えた。不用意に使われたテクノロジーが、自然を破壊し、生きものに脅威を与えたのを十分検証した。この本は深い共感と呼び、行動へと駆り立てた。まさにアメリカの環境改革の基本をつくった」(124)と述べ、カーソンを環境保護運動の先駆者と位置づける。周知のごとく、『沈黙の春』出版以降アメリカでは環境改革のために様々な取り組みがなされてきた。1970年には環境保護庁が設立され、またこの年にはアースデイもはじまり、その後も数多くの環境保全のための法律（大気浄化法、水質汚染規制法、絶滅危惧種法、汚染物質規制法）が制定された。まさにカーソンの『沈黙の春』をもって、時代は環境の時代へと突入していったのである。

しかしながら、カーソンは環境保護という概念に行き着く前に、自然保護の思想や自然保護運動という前段階を経験していたのである。カーソンが自然保護についてどのように向き合っていたのか詳しい論考は見当たらない。本稿は、カーソンがどのように自然保護を認識し、自ら自然保護運動に傾斜していったかを、1950年頃までの彼女の著作（多くが日本では紹介されていない）を通して分析しようとする試みである。

「カーソンと自然保護運動」というテーマは、要するに彼女の自然に対する見方や姿勢、つまりは彼女の自然観の分析が主となる。彼女の自然観がどのように形成されていったのかを調べていくと、そのプロセスは変化に富み大変興味深いものがある。多くの批評家がまず指摘するのは、彼女が自然に関心を持つに至った要因に、①生まれ育った故郷の環境がある。彼女の家はペンシルベニア州スプリングデールという小さな町の、小高い丘に広がる果樹園の中にある。家の周囲には多くの生きものが生息し、植生も豊かであった。ここには人間と自然との乖離は感じられず、すべては友達同士の関係で成り立っていた。幼いころからごく普通に自然を友とする生活が、彼女の自然観の出発点となった。

②その自然観を育み成長させたのが母親のマリアである。彼女は娘とともに戸外で多くの時間を過ごしている。後年カーソンは「われらをめぐる現実の世界」の冒頭、「自然界やそこに棲む生物に強い興味を抱いていました。そうした興味は母から受け継ぎ、

つねに母と分かちあってきたものです」(『失われた森』205)と語っている。また教育に熱心な母親で、当時流行していた自然学習——「教師や親たちが子どもに身近な自然を直接観察させながら、自然のさまざまな様子を心で感じとるように導くもの」(服部144)——を取り入れて娘に教えたこと。

③さらにカーソンの自然観形成に大きな役割を果たすことになる文学への関心を、マリアが読書を通して娘に教えたことである。カーソンの少女時代から学生時代にかけての読書量は膨大で、自然への想像力は尽きることもなかった。彼女のお気に入りの作家は、少女時代はビアトリクス・ポター、アーネスト・トンプソン・シートン、ジーン・ストラットン・ポーター、ハーマン・メルヴィル、ジョセフ・コンラッド、ロバート・ルイス・スティーブソン、学生時代や非常勤講師時代はヘンリー・メジャー・トムリンソン、ヘンリー・ベストン、ヘンリー・ウィリアムソン、リチャード・ジェフリーズであった。

④大学・大学院で生物および海洋生物学を研究したこと、および漁業局に就職して、さらに自然への理解を深める分野に進んだこと。⑤第二次大戦以降、自然ばかりか人間環境をも含む環境の異変を再認識し、エコロジカルで環境倫理的な自然観へと発展していったことである。シュバイツァーの著作から自然や環境への啓示——自然を破壊して豊かさを求める自己中心的な生き方を改め、他の生きものと共生してゆくこと——を得るのはこの時期である。いずれにせよカーソンの自然観が単一の要因に影響を受けたのではなく、いくつかの過程を経ながら徐々に成熟していったと考えるのが妥当であろう。

## カーソンの決意

後から考えてみれば、大学2年生の時が人生の最大のターニングポイントとなった。彼女自身が専攻を変えてまで選んだ道は生物学という、当時の大半の女性たちが敬遠する分野だった。それまでの自然愛好者という受動的な立場から自然を研究の対象としてゆこうとする20歳の決断は、もはや自らに後戻りを許さない、非情とも言うべき決意表明の表れである。その彼女自身が選んだ道は、やはり予想通り並大抵の道ではなかった。時代は経済の大恐慌期、しかも女性への差別や偏見が色濃く残る時代背景とあいまって、女性科学者として生きる道は困難を極めるものとなった。しかし彼女はこのような数多くの試練を経ながら、自ら選んだ道を後悔することなく信念をもって歩み続ける。

彼女は大学院修了後、大学の非常勤講師をつとめながらチャンスを待った。そんな中思いもかけぬ企画が持ち込まれた。それは商務省漁業局が実施する7分間のラジオ番組(「水の中のロマンス」という題の大衆教育シリーズ)の台本を書くことだった。これは彼女にとって好都合な申し出であった。魚類についての専門的な知識は十分に持ち合わせており、その上文学的な才能は幼い頃から実証済みであったからである。

1935年に父、翌年には姉を続けて亡くしたカーソンは、一家の大黒柱として高齢の母と姉の二人の娘を養わねばならなかった。そのために少しでも生活の助けになろうかと思ひ、地元の新聞社『ボルティモア・サン』紙に何編かの記事を寄稿し、掲載されてい

る。特に最初の「シャド漁の季節は間近」(“It’ll be Shad-Time Soon” 1936年3月1日)と題されたものは、「資源の保全、自然の複雑な仕組みへの敬意、そして人間の侵入によっておこる自然への影響に関するもの」(リア 120)で、シャド(ニシン科の魚)の個体数減少の理由として「破壊的な漁法、産業廃水と生活排水による水質の汚染、さらには水力発電と航行船舶のための河川整備」(120)を指摘するなど、カーソンの最初の自然保護論と言える。カーソンはこの論の最後でシャドの保護に言及している。

外洋での漁業と違ってシャドは主に州内の資源なので、連邦政府が保護指導しなければならない。漁業局はアラスカ以外に規則を認める権限をもっていないが、一連の提案を行っている。それによれば、大西洋岸諸州で現在行われている複雑な規制の代わりに統一したシャド漁の規制化が望ましい。要約すれば、上記の提案は以下のことを要求している。

シャド漁の始めと終わりを禁漁期にし、戻ってくる魚の一部が産卵場所まで安全に到達できるようにさせること。

魚が遡上する期間、一週間に2日間、禁漁期間を増やすこと。

チェサピーク湾とポトマック川下流部において、実際よりも遠くまで広がる壺網の使用を制限すること。

産卵期にはすべての種類の漁法から守れるようにポトマック川のシャドの主要な産卵場を含め、いくつかの地域に産卵場所を確保すること。

要するにチェサピーク湾地域で、このお気に入りの魚が破壊勢力から守られるためには、規制は必要で、それは結局漁業者ばかりかシャドの繁栄をももたらすことになる。

カーソンはシャドについて繰り返し論じている。彼女はシャドが絶滅に瀕したバッファローの二の舞になるのではないかと懸念し、「シャドはバッファローの道を歩みつつある」(“Shad Going Way of the Buffalo”)をチャールストンにある『ニュース・アンド・クーリア』紙に掲載した。

シャドを守れという支援者たちは、バッファローの後に続くもう一つの野生生物保護をセンチメンタルに訴えているわけではない。シャド保護論者たちは、国民のメニューにユニークな場をしめる重要な食料魚を守る闘いをしているのである。

春になればポトマック川をさかのぼり、ジョージ・ワシントンやジョン・マーシャルのテーブルまで運ばれるほど美味として重宝され、今でもその人気は衰えていない。春はシャド漁の季節で、大西洋岸では、シャドの卵とベーコンをそえてあぶり焼きにしたシャドは最高の料理とみなされている。シャドに代わるものはないが、一世紀におよぶ乱獲のために、商業的に絶滅が心配されるほどまでに減少した。

(中略)

漁業局はシャドの生物学的な謎を解明するために、詳しい科学的調査を要求された。自然保護が計画的かつ効果的であるためには、シャドが海で過ごす年月、回帰、敵、産卵期に漁師の網にかかるためになぜ帰ってくるかその要因を知る必要がある。淡水期の幼魚の成長と餌の研究、川の汚染が成長に与える影響も観察されねばならない。商業漁業が供給に与える損害も予測せねばならない。謎のもっとも重要なものの一つは、各川に固有のシャドが回帰してくるかどうかである。もし回帰してくれば、どこにおいても自然保護の政策が、その地域での回帰の大幅改善につながるであろう。そのような情報が自然保護の本質的な基盤であり、そのなかでこそ関係ある州が目に見える結果を求めて協力できるのである。

新しいプログラムのもと、人工養殖も役立つであろう。シャド養殖は最初発展をみたが、その後事実上なんら改善方法は行われてこなかった。カロライナ州がおそらく戸外での実験室となり、シャドの孵化が漁業局によって行われることであろう。川に返す前に、今まで以上に稚魚を大きく育てる試みがなされる予定である。

シャド漁に関心のある州の協力のもと、そのようなプログラムによってシャドは贅沢な魚から日常の魚となることが期待されている。

翌年に書かれた「1939年度のシーズンが始まって、シャド漁の漁獲高は減少している(“Shad Catches Declining as 1939 Season Opens” 1939年3月26日)では、再度シャドの問題を提起している。

かつて春が到来すれば、歓迎されていたシャドが、今では人気は下降気味である。原因は漁獲高の減少と食習慣の変化が考えられる。漁獲高の減少は過度の漁が原因で、食習慣の変化では、家庭の人数が少なくなって、以前ほど食べられなくなり、また骨の多いことが嫌われているからである。一方でシャド復活の研究が開始され、ハドソン川では実際に復活をとげている。その理由は、州政府の厳しい規制によるものであり、週4日の操業、網の長さの制限、産卵場での漁業を禁止したことにある。チェサピーク湾もハドソン川を見習うべき時にきている。

## 2. 「野生生物のための闘いを押し進める」

1936年8月、優秀な成績で入省した商務省漁業局で彼女を待っていた仕事は、漁業局補佐のロバート・ネズビットが行うチェサピーク湾に生息する魚の調査であった。「魚の生物学的、統計的データを解析して、生息年数と個体数の変動を導き出し、くわしく報告書を書き、魚類保護について一般向けパンフレットを書くことだった。カーソンはその仕事を楽しみ、またやりがいのあるものと感じていた。……その仕事には、科学的にも、文学的にも彼女の能力が必要とされていた。その仕事は彼女と自然とのつながり

を強め、海の生きものがつづれ織りのようにたがいにつながりあっている生態について、彼女の理解を深めていった」(リア 124-25)。このような中で、すぐれた自然保護論「野生生物のための闘いを押し進める」(“Fight for Wildlife Pushes Ahead” 1938年3月20日)が書かれるに至った。

この小論の構成は明白である。まず野生生物減少の要因として人間活動を挙げ、その後、過去の破壊の実例と現状とを具体的に比較し、最後に自然破壊の教訓として、アメリカを襲った砂嵐を通して政府の対応と今後の課題を提起している。

冒頭カーソンは「野生生物の減少は人類の運命にもつながるといって逃れようのない事実が、全国規模の自然保護運動 (conservation) によって痛感させられている。野生生物の減少は、生息地が破壊されたのが原因だと指摘される。だが、彼らの生息地は、すなわち私たち人類の生息地でもある」(『失われた森』38)と述べて、人間による開発が野生生物の生息地に重大な影響を及ぼして、その結果その数が減少していることを強調する。

この後の彼女の語りのレトリックは実に巧みで、読者は知らず知らずに自然環境の破壊の現場へと導かれる。彼女は「100年前は～であった」という表現を繰り返す。例えば「ほんの100年ほど前、この国の大半は手つかずの未開拓地だった……いたるところにハクチョウやガンやコクガンが見られた……西部の草原にはバイソンと匹敵する数のアンテロープが生息していた……」(38-39)。「100年前、ナチュラリストで画家のオーデュボン、ケンタッキーの故郷の村で、空がリョコウバトの群れで文字通り埋めつくされるのを目にした」(39)。「100年前、ニューイングランドでは、そこかしこにサケが泳ぎ、流れをせき止めるダムも、産卵場所の川床を汚染する工場もなかった」(39)。「100年前、南へ渡る水鳥の群れが、開拓地と未開拓地の境界線にそってつづくミシシッピ飛行経路を飛んでいた」(39)。その後「だが今日の野生生物はどうだろう？」(40)と問い、ヒースヘンやリョコウバトは絶滅し、オオホシハジロやアメリカホシハジロは深刻な状況に直面していることを告げる。

もちろん政府もだまっていたのではなく、「渡り鳥保護法を制定し、保護区を設けて状況はいくらか改善された」(40)が、ここでカーソンは多くの人が現状に目覚め、早急の対策をとることの必要性を提起しているのである。ところがこの記事の後半で、後のカーソンを知る者にとってはいささか不可思議なことが言及されている。意外なことに、カーソンは野生生物の商業的利益を換算してそのデータを詳細に明らかにしているのである。「狩猟や釣りなどの野外スポーツを楽しむ人々による消費は年間7億5000万ドルに達し、それ以外の野生生物関連の娯楽による消費は5億ドル以上になると見積もられる……こうした数字は、野生生物の保護が利益につながるという事実を裏づける証拠である」(41)。カーソンが野生生物の経済的価値に言及したのは、もちろん読者の理解が得られやすいと見なしたことだけでなく、実際のところ、当時の自然保護政策においても、例えば後に詳しく述べるように、政府の管理化にある野生生物保護区でさえ狩猟が許可されていたという厳粛な事実があった。政府機関の一員としてのカーソンが、政府の方針に背くことは許されず、彼女が真の自然保護運動に立ち上がるためにはもう少し

時間が必要なのであった。

さてカーソンの論考の重要な点は、最後のところにある。自然の無秩序な開発が人間生活に甚大な害を及ぼすことについて、当時のタイムリーな話題であった「砂嵐」を引用し、読者の納得を得ようとしているところである。彼女は1930年代に頻発した砂嵐と、黄塵地帯 (Dust Bowl) を取り上げて最後の主張をまとめている。ドナルド・オースターによれば、砂嵐は三大生態系破壊の一つに属し、他の二つは紀元前3000年頃に起きた中国における森林破壊と、地中海沿岸における家畜による植生の破壊であると語る (4)。アメリカの場合、30年間に及ぶ単一作物栽培の結果、大草原地帯の表層土壌が浸食され、乾期の頃砂嵐となって他の地域に被害を及ぼした出来事で、特に1934年5月の砂嵐は大西洋側まで砂が飛来している。無節操な開拓が極度に進んだ結果、微妙な生態系のバランスが崩れてしまったのであった。この出来事は一般大衆が環境保全への認識を新たにしたいという点で、大変意味のあることだった。

総じてカーソンのこの小論は、彼女が野生生物の絶滅や減少を扱った「環境史」に関心を持っていたことを教えてくれる。環境史そのものは1960年代以降に現れた研究分野であるが、カーソンが早くから人間と自然環境との関係に注目していたのには驚かされる。最終的にカーソンがこの小論で目指したところは、自然の破壊は「人間活動」によるものであり、それはそのまま人間自身の生活を傷つけることにつながることを示している。人間活動による自然の破壊については、古くは1864年、ジョージ・パーキンズ・マーシュが『人間と自然——人間活動による自然の変化』の中ですでに指摘していた。19世紀半ばという時代を考慮すれば画期的な論考であったにちがひなく、ギフォード・ピンショーやジョン・ミュアも理解を示していたと言われている。しかしながら「無尽蔵の夢」に取り憑かれた当時のアメリカ人やアメリカ政府には受け入れがたい事実であったのは言うまでもない。実際のところ、「フロンティアの終焉」はすでに1890年に宣言されていたのに、20世紀の前半までアメリカ国民は無尽蔵の夢を見続けていたのであった。マーシュの著から70年余後の1930年代、人間活動による自然環境の変化は19世紀とは比べようがないほど巨大化していたはずだが、それでも砂嵐の洗礼を受けるまで一般の人々には疎遠な問題であり続けた。いずれにせよ、人間活動による自然環境への負荷、およびそれに対する危機感こそカーソンの自然観の根幹を形成するものとなっていった。

## 魚類野生生物局

1930年代、アメリカの自然保護を司る政府機関には、農務省管轄下の森林局 (国有林担当) と生物調査局 (野生生物担当)、内務省管轄下の国立公園局 (国立公園担当)、そして商務省管轄下の漁業局 (海洋生物担当) があった。カーソンが専門性を発揮し、やりがいを感じていた漁業局だが、自然保護派であった当時の内務長官ハロルド・イッキス (1874-1952 在位1933-46) はさらに大きな野望を抱いていた。彼は1940年に生物調査局と漁業局を統合して、自らが率いる内務省管轄下に魚類野生生物局を組織したので

ある。国立公園局と魚類野生生物局を傘下におさめた内務省は、自然保護において大きな力を持つ組織となった。カーソンにとってもこの意義は大きい。というのも彼女は魚類ばかりでなく野生生物、とりわけ鳥類にも造詣が深かったので、新しい部局は彼女にとって最適の仕事場となった。

### 3. 「自然保護の誓い」

1941年に第一作『潮風の下で』を出版し、専門家の間では高い評価を得たものの、時代は第二次世界大戦へと突入する中で、人々は彼女の作品に目を向ける余裕はなかった。結局『潮風の下で』は売れ行きが伸びず、作家としての夢は中断を余儀なくされたのであった。彼女も戦争に翻弄された一人であったと言えよう。この期間、彼女は戦時協力の名の下に魚類野生生物局が担当した『食料になる海の生物』(*Food from the Sea*)というシリーズものに加わった程度で、自然保護に関する論考をまとめる余裕はなかったように思われる。しかし戦争が終わりを告げ、社会も落ち着きを取り戻し始めると、彼女は一家の大黒柱としていくつかの雑誌に投稿したり、雑誌社のコンテストにも原稿を書き送って経済的不安の解消を考えていた。そのような中、アウト・ドア社が主催する「自然保護の誓い」というコンテストに「アメリカが自然資源を保護する理由」(“Why America’s Natural Resources Must Be Conserved”)という題で応募したところ、見事に最優秀三作に入賞し、1000ドルの賞金を獲得している。

#### 「自然保護の誓い」(“Conservation Pledge” 1946)

##### 「アメリカが自然資源を保護する理由」

一般的にアメリカは危険な状況を呈しつつある。つまりアメリカ——伝統的に他国に比べて豊かであったアメリカ——が、いまや貧しくなりつつある。それはかつてアメリカを強く、偉大で自由にさせていた多くのものを失いつつあるからである。時間があるうちに、国民が目を覚ましてこの事実を直視しなければ、アメリカは世界の中で弱い国の一つとなるであろう。(中略)

わが国の豊かな自然を保護することは、ただ単に夢見ることでは達成されるものではない。ましてや他人まかせでなされるものでもない。私たちの国に対する夢は、自らの行動、および仲間たちや議員に影響力を行使することによって、各人が自然資源の保護に積極的役割を果たす義務を認識することによってのみ達成されるのである。

アメリカの偉大さは、大地に築かれた国の大きさである。アメリカの強さは輝く穀物畑、巨大な森林と川、土中深く眠る資源、陸や河川の野生生物にある。これらがすべてのアメリカ人の遺産なのである。絶えず注意深く大切にし、浪費から、開発から、破壊から守ることによってのみ、わが国はこれからも強く自由な国であ

り続けるであろう。

1938年新聞に寄稿した「野生生物のための闘いを押し進める」が、どちらかと言えば具体的な事実を積み重ねながら読者に語りかけることを心がけていたのに対し、今回は字数制限があったのか極めてコンパクトにまとめられている。内容も表現方法も非常に似通っているが、「自然保護の誓い」の方が「誓い」だけあって、カーソンの心情がそのまま反映されている。アメリカがアメリカであり続けるためには、アメリカ国民一人一人が現状に目覚めて、無尽蔵という神話を捨て去り、自ら自然保護運動に積極的に関わっていくことが肝要であると力強く主張する。

#### 4. 『自然保護の現状』

政府機関の再編をうけて漁業局と生物調査局が統合する形で魚類野生生物局がつけられた。国立公園局とともにアメリカの自然保護を担う部局に彼女が職を得たことは幸運であった。カーソンに任された仕事は、「覚書や報告書の作成、魚類の管理、経済的価値、博物誌に関する出版物を書くこと」(リア 159)であった。そのような中の1946年、彼女は魚類野生生物局が管理する国立野生生物保護区(National Wildlife Refuge)を紹介する、一般読者向けのブックレットシリーズ『自然保護の現状』(*Conservation in Action*) 12冊を出版する企画編集の責任者となった。

野生生物保護区は、古くは1903年にセオドア・ルーズベルト大統領がフロリダ州のペリカン島を保護区に指定したことに始まるが、自然保護に理解のあるルーズベルトは任期中に50以上もの保護区を設置し、アメリカにおける野生生物保護という自然保護は大きく発展した。従来は農務省の生物調査局が管理していたが、組織再編の結果、カーソンのいた漁業局と統合されてできた魚類野生生物局が管理するに至った。しかしながら、国立野生生物保護区の管理運営は新しい局の重要な仕事であるが、意外なことに保護区とはいえ保護区内での狩猟は許可されていた。魚類野生生物局は他の森林局や国立公園局ほど予算には恵まれず、保護区内の狩猟を認めることでハンターから duck stamp と呼ばれる税金を徴収し、それを保護区の管理にあてている状況だったのである。さらに1950年代、後にカーソンも論争に巻き込まれることになるマッケイ内務長官の時代には、保護区を開発しようとする動きも見られた。マッケイの時代とは、1953年に始まる共和党政権下、内務長官に任命されたマッケイが自然保護運動に熱心な政府役人を解任したことにある。カーソンが絶大な信頼をおいていた魚類野生生物局局長のアルバート・M・デイが解任されたことで、このときすでに魚類野生生物局を退職してフリーとなっていたカーソンは初めて政治的なメッセージを『ワシントン・ポスト』紙に寄稿している。国立公園局とは比べようがないほど脆弱な政府機関が管理する野生生物保護区に危機が迫っていたのであった。



国立野生生物保護区は1966年に国立野生生物保護区システムとして再構築され、現在では37万平方キロメートルを擁し、国立公園システムより広い地域を管理している。ただ予算面での制約や法整備の不備がささやかれている。批評家のシャベコフによれば、実態は惨憺たるもので、都市化、密猟、外来種、大気汚染、石油の掘削、放牧、合法的な狩猟などの問題が山積している。「一般的に信じられているのとはちがって、現実には大部分の保護区が野生生物の聖域ではない。政府の保護区維持の計画は、ハンターが支払うダック・スタンプの収入に支えられている」(184-85) 有様なのだ。現在もっとも懸念されているのは、8万平方キロメートルを超える北極圏国立野生生物保護区で、ここに眠る石油をめぐる開発派と自然保護派が激しく対立している。

『自然保護の現状』は一般になじみのない魚類野生生物局の仕事、特に国立野生生物保護区における野生生物の保護政策を一般の人々にわかりやすく伝えるガイドブックの類で、図版や写真を多用しているのが特徴である。保護区を教育の場として活用したいというカーソンの長年の想いが実現したのである。12冊のブックレットのうちカーソンが直接関わったのはこのうちの5冊——「シンコティエグ国立野生生物保護区」(1947)、「パーカー・リバー国立野生生物保護区」(1947)、「マッタームスキート国立野生生物保護区」(1947)、「野生生物資源を保護する」(1948)、「ベア・リバー国立野生生物保護区」(1950)——で、最後の「ベア・リバー」は共著という形をとっている。彼女自身この4箇所を足を運び、緻密な調査を行っている。そのような調査から揺るぎない真実が伝えられたのである。これは後の『沈黙の春』にもあてはまることである。

この5冊を検討すれば、彼女の関心が魚から鳥類(渡り鳥)に変わっていることに気づくだろう。彼女が選んだ4つの保護区はすべて渡り鳥飛行ルート沿いにある渡り鳥保護区として重要な地域である。大学院で海洋生物を専攻し、漁業局に就職したカーソンはもちろん魚類の専門家であったが、鳥についても相当な博識だったのである。これは彼女が少女時代の頃『セントニコラス』に掲載された「私の好きな楽しみ」(1922)や、後の小作品「自然界の空のエース」(1939)、「ムクドリに市民権はいかが」(1939)、「鷹の道」(1945)からも理解できる。リンド・リアによれば、「カーソンは生涯を通じて海に魅了されたとともに、鳥類にも同じくらい深い興味を抱いていたが、それはもともと、ペンシルヴェニア州西部の丘陵地帯を母とともに散策することによって生まれたものだった。彼女は鳥たちへの愛着を終生抱きつづけた」(『失われた森』58)。母親の役割のほかに、当時の児童文学において鳥がしばしば取り上げられていた。「鳥の生態を学ぶことを通して、自然を愛し、自然の保護を心がけるようになるようにとの目的をもって興味をそそるよう描かれていた」(リア 27)。もともと彼女にとって魚と鳥は正反対のものではなかった。バードウォッチングで有名なホークマウンテンを訪れた時のノートには「海の大好きな私に、それを思い起こさせるものが山の中にたくさんあることは、さして不思議ではない。岩をかむ溪流を見れば、たとえその流れの行路は長くとも、やがては海へ入るのだと私は思わずにいられない。また、このアパラチア高原地帯には、この陸地を幾度か覆いつくした太古の海を思い出させるものがたくさんある」(ブ

ルックス 99)。海洋作家としてのイメージが強いカーソンであるが、後の代表作『沈黙の春』は海の魚よりも鳥が象徴的な役割を果たしている。

鳥に関してもう一つ重要なことは、彼女が鳥類保護では権威のある自然保護団体オーデュボン協会に属していたことである。全米オーデュボン協会 (National Audubon Society) とは、19世紀に鳥を描いた画家オーデュボンにちなんでつけられた自然保護団体で、最初1886年に創設され、その後1905年に再設立された自然保護団体である。元来1880年代、装飾用の鳥の羽根の需要が伸び、むやみに鳥類が殺戮されたことに対する抗議として誕生した。バードウォッチング、鳥の生態調査、鳥の習性、生息地に関する教材の開発などを手がけている。アメリカでも有数の自然保護団体の一つで、カーソンは第二次大戦中に入会し、単調な仕事の合間には協会の社交的集まりや遠出などの活動を大いに楽しんでいただ。さらに「会報」(*Massachusetts Audubon Society Bulletin*) にも「パーカー・リバー——ニューイングランドの自然保護プロジェクト」(1947) という記事を掲載している。カーソンとオーデュボン協会との関係は、『沈黙の春』出版以降さらに密になる。協会は『沈黙の春』が出版された時、いち早くその抜粋を会誌に掲載してカーソンを擁護した。カーソンはいくつかの自然保護団体に属していたが、彼らの協力があってこそ大企業や政府と対抗できたのである。オーデュボン協会は自然保護に関する顕著なカーソンの功績を認めて、1963年彼女にオーデュボン・メダルを授与した。さて『自然保護の現状』シリーズに共通するカーソンの序文から検討することにしよう。

## 序 文

わが国の野性的な地方を旅すれば、遅かれ早かれ国立野生生物保護区の象徴である飛んでいるガンの標識に出会うことになるでしょう。

中西部の何マイルも続くプレーリーを横切る道端で、あるいは南西部の灼熱の砂漠の中で見かけるかもしれません。またどこかの山の中の湖、あるいは海岸の湿地帯の曲がりくねった塩水の小川をボートで進んでいる時などに見かけるかもしれません。

この標識に出会うときはいつも敬意を表してほしいと思います。この標識の背後にある地は、アメリカ国民が自分たちや子どもたちのために、現代文明と共存する固有の野生生物をできるだけ多く保護しようと努めてきた地なのです。

野生生物は人間と同様に生きる場所がなくてはなりません。文明が都市をつくり、ハイウェイを築き、湿地帯を干拓するにつれて野生生物にとってふさわしい土地は少しずつ奪い取られてきました。彼等の生息地が減少するにつれて数自体も減ってきています。保護区はいくつかの地域を文明の侵入から守り、野生のものが生きるために必要な状態を保存し、あるいは必要なら回復させることで、このような傾向に歯止めをかけようとしているのです。

序文らしく国立野生生物保護区の存在意義について、力強く語りかけている。ただ未来世代のために「現代文明と共存する形で野生生物をできるだけ多く保護する」ことが重要であるという表現は少々説明が必要である。カーソンが言おうとしているのは、人間文明だけが発展することは必然的に野生生物の生息地、つまり自然の破壊につながるということである。自然の破壊はすなわち人間文明の崩壊でもあるということなのだ。文明衰退の原因の一つに自然環境の破壊があったことは古代の歴史が証明するところである。このような主張はソロー以降のネイチャーライティングの主要なテーマの一つでもあり、ラディカルと言われているエドワード・アビーですら文明と自然は相補的でなければならぬし、人間文明も自然を欠けば存亡の危機に瀕することをたえず強調している。またカーソンは野生生物の種や個体数にも言及している。彼女は生物多様性という言葉は使用しなかったが、生物多様性の概念が自然保護、ひいては環境保全に肝要であることは理解していたように思われる。以下各国立野生生物保護区について見てみよう。

### シンコティグ国立野生生物保護区

ヴァージニア州にあるシンコティグ国立野生生物保護区は水鳥の飛行ルート沿いにある一連の保護区の中でも最も新しいものの一つである。(中略)シンコティグは他の水鳥保護区と同様、渡りをする鳥は、その過程で危険にさらされるゆえに必要である。鳥の渡りは地上の古代風景の一つであり、もっとも神秘的なものの一つでもある。しかし私たちはなぜ鳥は渡りをするのか、どのようにしてはるか遠くまでの道を見出すのかほとんど知らないが、常識からして人間の旅人と同じく、鳥も安全な場所に立ち止まって餌や休息をとる場所がなければならない。

以前渡り鳥にとって休息する場所はたくさんあった。それは我々の拡大する文明が湿地帯の水を抜き、水を汚染させ、ウィルダネスの代わりにリゾートタウンをつくる前のことである。ハンターの数もほとんどいない頃で、当時水鳥の数はおそらく2億羽はいたであろう。現在ごくわずかのものが残っているだけである。

もし我々が残された水鳥、そして彼等に依存する狩猟やレクリエーションを守りたいのであれば、生き物に必要な餌、休息、安全のあるシンコティグのような鳥の保護区を取っておかねばならない。

シンコティグが保護区として選ばれたのは、魚類野生生物局の生物学者がボンベイ・フックとバック・ベイの保護区間の隙間を埋めるために最高の場所を捜し求め、このヴァージニアの東海岸にある野性的な鳥が多数の種にとって保護と繁殖地になるだろうと決定したからである。保護区としてこの地の購入は1942年渡り鳥委員会によって認められ、1945年になって正式に魚類野生生物局の管轄下に入った。

シンコティグの位置決定には二つの理由が考えられる。一つは地形的特徴で、海岸、砂丘、湿地帯、森林地と保護された水辺がつながっているからであり、もう一つは、鳥の渡りルートとの関連である。

## パーカー・リバー国立野生生物保護区

パーカー・リバー国立野生生物保護区は、北アメリカの水鳥を救うために国家が行ったニューイングランドに対するもっとも重要な貢献の場である。多くのアメリカ人がこの努力の成功に直接関わっている。200万人の水鳥ハンターたち、鳥の観察や写真撮影にレクリエーションや美的喜びを見出す何百万人もの人々、野生生物を守る価値をアメリカの自然遺産の一部と理解する数え切れない多くの人たちがいる。

アメリカが著しく野生で未開拓な地から産業主義的かつ農業国へと変わっていった数世代の間、水鳥はかつて生存していた地域の多くから駆逐されてきた。同じ時期に、銃市場の盛衰があり、またスポーツハンティングが着実に成長してきた。

この時期、水鳥の数は少なくとも三度の減少期があった。1915年と1930年代に最小に達し、その後幾分回復したが、三度目の大きな減少は1944年に始まった。このような周期的な減少傾向、おそらくは今回、次回、またはその次には、水鳥の群れはもはや回復できない程度まで減少するかもしれない。

野生の水鳥を救うためには、私たちがなすもっとも重要なことは、文明の只中で生きるために必要な彼等が使う地域を保存し、そこに湿地帯や池、自然な餌、保護区を提供することである。アメリカ全体に200の国立水鳥保護区が広がり、これらを提供している。水鳥保護においてこれがもっとも大切なことである。

## マッターズキー国立野生生物保護区

『失われた森』 pp. 72-81. 参照

## ベア・リバー国立野生生物保護区

1842年秋、バッファローの皮で作った一艘のカヌーがベア川を下ってユタのグレイト・ソールトレイクにある河口にたどり着いた。広大な内陸の海を見渡すと、ジム・ブリッシャーは驚きで立ち止まった。どこを眺めても——上空、開けた湖、湖の沼地のどこにも——鳥がいた。その有名な西部ウィルダネスの探検家は、「何百万ものカモとガン」を見たという報告を持ち帰ったと言われている。

その後まもなく、ベア川の沼地では水鳥の数は何百万から何千にまで減少した。白人開拓者が灌漑のために水路を変え、水鳥たちが餌と保護を見出していた沼地を排水し、狩猟家が何千と水鳥を殺すにいたり、他の多くの鳥たちも一連の破壊的出来事から生じた病魔の犠牲になってしまったのである。

しかし現在、自然保護という奇跡が達成され、再度ジム・ブリッシャーの時代のようにベア川上空は何百万という鳥で埋め尽くされている。この奇跡を達成したベア川渡り鳥保護区は、アメリカ大陸の名所の一つとなっている。約2万人が毎年訪れ、

特に秋の渡りの時期に、文字通り一日で百万ものカモを見ることができる。他では珍しいとされる多くの種が、ここでは沼地堤防上の1マイルの砂利道を車でゆっくり運転するとだれでも見られる。ここには北や南から、大陸の西半分のいたるところを飛んできた鳥がいる。この壮大な光景の場所が、北アメリカの鳥保護上重要となっている。

ベア川の湿地帯はかならずしも現在と同じではない。保護区の環境は最初はゆっくりとした歩み、それからその地に人が定住したことによる変化を通して急速に変貌した。人間による変化はよいこともあれば悪いこともあった。

### 「野生生物資源を保護する」

『自然保護の現状』に掲載されたカーソンの4本の解説は、それぞれ一つの国立野生生物保護区を訪れて調査した結果を報告するとともに、写真をまじえて職員の仕事振りを紹介し、保護区への道順を書き込むなど政府刊行物とガイドブックの両方の機能を持ち合わせている。一方注目すべきは1948年に発行された「野生生物資源を保護する」(“Guarding Our Wildlife Resources”)である。ちょうど10年前に書かれた「野生生物保護を押し進める」の論をさらに発展させ、国際的な視点を含めた野生生物の世界を鳥瞰する、当時としては画期的で壮大な自然保護論となっている。それは目次を見ただけでもわかる——「渡り鳥——北半球の資源」、「大型哺乳動物」、「絶滅危惧種を救う」、「野生生物復活の協力」、「海洋漁業」、「内陸の漁業資源」、「魚類保護における国際協力」、「自然保護における南北アメリカの協力」。

もちろん当時の自然保護に関する著書、たとえばジョン・ミューアの『アメリカの国立公園』(1901)やアルド・レオポルドの『野生のうたが聞こえる』(1949)と比べると重厚さの点で物足りなさはあるが、政府刊行物という視点から見れば、46ページという長さとその充実した内容は高い水準を維持しているように思われる。「野生生物資源を保護する」の冒頭から数ページは次のように書かれている。

これからアメリカの野生生物資源、野生生物の歴史的な位置づけ、および現代社会における彼らの価値についての話を始めよう。それはまた野生生物を破壊しようとする勢力の話でもあり、国家として、州共同体として彼らを守るためになされた努力の話でもある。

「西半球においては、人間による天然資源の開発の歴史は比較的短い。それにもかかわらず、その中には無謀な浪費やおそろべき破壊の数々が含まれている。動物の純粋種は絶滅したか、または今後生き残るのもおぼつかないほど少なくなっている。森林は、無秩序で過度の伐採のために略奪され、原野は広範な放牧によって破壊されている。あれこれの行為は、土壌の流亡、洪水、農地の破壊、野生生物の生息地の喪失というような、すべての害悪を伴ってわれわれを苦しめている。

それぞれの国のすべての人民は、自然保護と直接的なかわりを持っている。たとえば、漁師や猟師にとっては、その関係は経済的なものである。また他の人びとにとっては、自然保護が達せられれば、狩猟、魚釣り、野生生物の研究と観察、自然の撮影などの好ましいリクリエーションをつづけることが可能になる。また別の人にとって、生きた自然の色や動き、形の美しさをみつめることは、音楽や美術と同じように美へのよろこびを享受することになるのだ。より基本的にいえば、野生生物やその生息地を愛護することはまた、地球の大切な資源の保存を意味している。その資源は、人間と動物のいずれを問わず、彼らが生きるために持たなければならぬものなのだから。野生生物、水、森林、牧場——これらのすべては、人間にとって必要欠くべからざる環境をかたちづくる部分である。その中のある一つを保存し、かつ有効に利用するということは、その他のものも保存しなければ達成できないものでもある。」(ブルックス 99)

危機的な資源の喪失に目覚めた大衆は、終に行動を要求した。1903年、運動の成果として、野生生物のための国の保護区が創設された——今までに約300の保護区がつくられ、面積は合計すると約1800万エーカーをほこる。1916年に始まる一連の国際条約や法律によって、自由に国境を越えて行く渡りの種——特に鳥類——を保護することが政府に義務付けられた。その後も財政的援助や建設的な自然保護の取り組みのための法律が整備されてきた。

1872年、魚類保護に必要な調査を実施する政府機関が設立され、数年後鳥類と哺乳類に関する同じような責任をもった機関も設立された。これらの政府機関が現在統合されて魚類野生生物局となっている。魚類野生生物局は調査のほかにも渡り鳥に関する保護法を運用し、アラスカでは狩猟用動物と商業用魚を含め、野生生物保護のための法律を施行している。

在住の鳥、哺乳動物、魚類を守る主責任は州に属するので、各州がそれぞれの保護機関を持っている。ふさわしい法制化で狩猟期間や漁期を規制したり。狩猟や漁獲高の限度を決めたり、商業漁業をコントロールしている。

野生生物の保護育成のための法の施行は政府の責任であるが、アメリカの自然保護はその効果の多くを個人や民間企業に負っている。このような団体の中には調査のスポンサーとなったり、保護区の土地を購入・維持したりするところもあれば、野生生物の生息地の回復・改善を積極的に行う団体もある。建設的な自然保護方法の擁護と、自然資源の浪費と破壊に反対することで、このような団体は自然保護のために一丸となって指導力を発揮している。

以下のページではアメリカの例を主に選んでいるが、北アメリカにおける野生生物保護の物語を簡潔に語るものである。文明の進歩はあまりにもしばしば破壊的なものであるので、現代世界において野生生物を保存しようとする試みは困難と挫折を味わうことは資源を保護しようと闘っている国ならどこでも見られるものである。

資源と同様、野生生物の保護は状況に応じ、効果を常に追求しながらダイナミッ

クでなければならない。私たちアメリカは、現在と同じ豊かな自然の富が付与された国土を確実に後世に残すためには、まだまだ多くのことをやり遂げねばならない。

カーソンの序文にも言及されていたように、自然保護の中心となる野生生物をなぜ保護するのかという疑問に対して、読者の理解を得やすいように具体的な必要性を列挙する。そのうちの一つは、狩猟や漁業という経済性、次にレクリエーション、美の喜びを挙げる。さらにもっとも重要なものはエコロジカルな相互依存の自然の見方である。野生生物が生きる場所、すなわち良好な森林や草地、水場などがある生息地こそ、私たち人間にとっても優れた住環境が提供されるということにつながるとカーソンは語る。文明の背後に豊かな自然があってはじめて人間は良好な水や空気を享受できるのである。カーソンのこの一節は巧みに読者に野生生物の必要性を理解させているように思われる。つまり野生生物およびその生息地は、鉄や銅や石炭などと同様にアメリカにとって重要な「自然資源」(natural resources)なのであり、アメリカの偉大性を継続させる原動力のようなものなのでもある。これに国民が目覚めるように、カーソンは必死になって訴え続けるのであった。

一方でカーソンの不安も垣間見られる。文明の進歩があまりにも速いために、「人間」という種の活動や営みの累積に懸念を覚えているのである。1950年代以降、カーソンの人間を見る眼はいつそう鋭敏となってゆく。この文明の進歩、言い換えれば増大する「人間活動」が後の『沈黙の春』に暗い影を落とすことになるのは容易に想像できる。「野生生物資源を保護する」の中から、「絶滅危惧種を救う」の章を取り出してみよう。

## 絶滅危惧種を救う

北アメリカでは固有種が絶滅にまで至った不幸な例を体験している。そのような種には、オオガタウミスズメ、リョコウバト、ヒースヘン、ラブラドル・ダック、カロライナ・インコと、おそらくはエスキモー・ダイシャクシギも含まれることだろう。アメリカにおけるこのような鳥類を救う自然保護運動はあまりにも遅すぎた。ナキハクチョウやアメリカシロヅルのような種も絶滅の危険水域に達しているが、まだ少しは生き延びている。

北アメリカ最大のもっとも美しい水鳥の一つナキハクチョウの営巣地を保護するために、1935年レッド・ロック湖群保護区がアメリカ政府によって設立された。レッド・ロック湖群は、モンタナ州南部の山中にある標高の高い辺鄙な溪谷に位置している。ここではナキハクチョウは十分な餌と巣づくり用の茂みを得て、だれにも邪魔されることはない。冬期は厳しいものの、一連の湖の先にある大きな泉は凍結することなく、水場を提供している。ここが重要なのは、この生き残ったコロニーが祖先から受け継いだはずの渡りの本能を失ってしまい、一年中ここに留まっているからである。

保護区が設置されて以降、アメリカにおけるナキハクチョウの数は1935年の75羽から1947年の350羽まで増加している。約半数がレッド・ロック湖群にいて、残りが近くのイエローストーン国立公園や隣接する小さな湖にいる。魚類野生生物局は幼鳥をレッド・ロック湖群からオレゴン、ネヴァダ、ワイオミングに移しているのので、新しいコロニーがつくられるかもしれない。

事態はアメリカシロヅルの方がはるかに深刻である。最新の推定では、この美しい鳥は今日北アメリカではせいぜい30羽程度いるだけである。アメリカ中央部やカナダのプレーリーにおける農業開発が多くの繁殖地を破壊してきたからだ。わずかに生き残ったものが遠くカナダの湿地帯に営巣し、メキシコ湾岸で越冬している。魚類野生生物局はテキサス州に47000エーカーのアランサス保護区を設立し、越冬地確保に協力した。毎冬約25羽のアメリカシロヅルがアランサスで見かけられる。

アメリカシロヅルの保護は、3000マイルもかけて大陸横断するので一層の困難を帯びている。長年にわたって法的な保護も受けてきたが、渡りは危険にさらされている。アメリカシロヅルの営巣地の発見と幼鳥を育てる親鳥の保護は、一般の人々が現在の法の施行に関心を持つことで、現在の危険な状況から将来的に救われることになるかもしれない。

## むすび

『自然保護の現状』に関して、ブルックスが「カーソンは生態学的な見解を発表した。それは一時代を経た今日においても決して陳腐なものとなっていない」(99)と語っているように、当時まだ一般的でなかったエコロジーという概念を全面的にだして自然保護を唱えたことは、後の自然環境保護運動にとって大きなチャレンジでもあり、拠り所となっていた。

カーソンが自然保護を唱え、自然保護運動に果たした貢献は決して小さくはないが、魚類野生生物局の職員という立場で活動している以上、その限界は明らかである。彼女が自然保護を高らかに自由に表明してゆくためには、作家として独り立ちする以外に道はなかった。その意味で『われらをめぐる海』の劇的な成功は、作家として専念できる時間と悩まされ続けていた経済的独立を彼女に約束した。彼女の自然環境保護論は、徐々に人間の生き方や文明そのものへの洞察へと向う。いみじくも後になってネイチャーライターのピーター・マシーセンが述べているように、「真の文明とは、かつてわたしたちが進歩という名のもとに次々に行ってきた陸地の略奪行為からではなく、自然保護の考えからうまれるものである。……森林、土壌、水、野生生物などはみな互いに依存し合っており、どれかひとつの要素を破壊することは、最終的にすべてを破壊することにつながるのだ」(14)。

カーソンと自然保護運動との関わりは、いくつかの段階を経ながら徐々に熟成されていったといっても過言ではない。もちろん彼女はジョン・ミューアやデイヴィッド・ブ



ラウアーのように自然保護運動を引っ張っていくタイプではなかったが、彼女が天分としてもっていた自然科学者と詩人の二つの要素が融合して、新しい価値観や自然観をつくりあげていった。最終的に彼女が到達した自然観、世界観は、彼女自身が科学の世界で体得したエコロジー思想（具体的には相互依存の概念）、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー以降のネイチャーライティングの伝統(具体的には、人間と自然とのよりよき関係、自然における人間の位置、自然の精神的意味等の探究)、そしてアルバート・シュバイツァーが唱えた「生命への畏敬の念」が基幹となって、より成熟した環境倫理想に結実した。その一例は1963年「CBSレポート」で語られた次の言葉に要約される——「私たちは、自然の支配に熟達するのではなく、私たち自身を制御する面で熟達することを、今日ほど強く求められたことはなかったのです」(ブルックス 313)。

## 引用文献

- カーソン、レイチェル 古草秀子訳『失われた森——レイチェル・カーソン遺稿集』集英社文庫、2009.
- シャベコフ、ヒヨリップ さいとうけいし+しみずめぐみ訳『環境主義』どうぶつ社、1998.
- 服部道夫『『センス・オブ・ワンダー』とネイチャーゲーム』上岡・上遠・原共編著『レイチェル・カーソン』ミネルヴァ書房、2009. 141-52.
- ブルックス、ポール 上遠恵子訳『レイチェル・カーソン』新潮社、1992.
- マシーセン、ピーター 早川麻百合訳『北米大陸の野生』東京書籍、1994.
- リア、リンダ 上遠恵子訳『レイチェル——レイチェル・カーソン「沈黙の春」の生涯』東京書籍、2002.
- Carson, Rachel. "Bear River: A National Wildlife Refuge." *Conservation in Action* #8, U.S. Fish and Wildlife Service, 1950.
- . "Chincoteague: A National Wildlife Refuge." *Conservation in Action* #1, U.S. Fish and Wildlife Service, 1947.
- . "Fight for Wildlife Pushes Ahead." *Baltimore Sunday Sun*, 20 March, 1938.
- . "Guarding Our Wildlife Resources." *Conservation in Action* #5, U.S. Fish and Wildlife Service, 1948.
- . "It'll be Shad -Time Soon." *Baltimore Sunday Sun*, 1 March, 1936.
- . "Mattamuskeet: A National Wildlife Refuge." *Conservation in Action* #4, U.S. Fish and Wildlife Service, 1947.
- . "Parker River: A National Wildlife Refuge." *Conservation in Action* #2, U.S. Fish and Wildlife Service, 1947.
- . "Shad Catches Declining as 1939 Season Opens." *Baltimore Sunday Sun*, 26 March, 1939.
- . "Shad Going Way of the Buffalo." *News and Courier*, 14 February, 1937.
- Dolin, Eric Jay. *The U.S. Fish and Wildlife Service*. New York: Chelsea House Publishers, 1989.
- Worster, Donald. *Dust Bowl*. New York: Oxford UP, 1979.

\* 本稿は科学研究費（題目「アメリカ文学と自然・環境保護運動」）の交付を受けて書かれたものである。